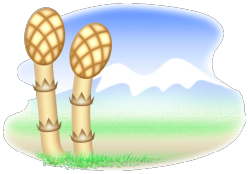
臺
（うてな）

令和　７年　　４月

第１９９号

目　次　　頁

春の虎落笛・・・・・（箱蔵　剣）・・・・２
無双集　６
・・（久我正明）・・（城戸義文）・・６
・・（井上まり）・・（中矢えり子）・７
・・（山口葉都緒）・（福島心結）・・・８
・・（源　言鬼）・・・・・・・・・・９
花信風信・・・・・・・・・・・・・・・・・９
紫竹集、一句・・・・・・・・・・・・・・・１０
紫竹集・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
新聞掲載句・・・・・・・・・・・・・・・・１５
小天守・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
うてな集・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
パラオだより（西田上酢）・花信風信・・・２４
言葉のこよみ・・・・（城戸　義文）・・・２５
２月号私の共鳴句・・・・・・・・・・・・２８
久我正明の部屋・・・・・・・・・・・・・３０
共鳴五句・・・・・・・・・・・・・・・・・３２
余韻一滴・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
誌上句会⑥・・・・・・・・・・・・・・・・４９
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・５２
「臺」俳句会小規・・・・・・・・・・・・・５２



「臺」題字・・・・・（鎌田　恵山）・・表紙
表紙絵・・・・・・・（仲上　　豊）・・表紙
主宰の言葉・・・・・・・・・・・・・・表紙裏

表紙絵
仲上　豊（生没年不詳）
「みんな金もらうのがプロや思てるけど
手抜きせんのをプロ言うねんで。」
主宰記憶の仲上語録。

臺は旧かな遣いです

春の虎落笛

箱蔵剣

睦み合ふ夜風や春の虎落笛

黒白の糞の階春の鳥

牛酪の消ゆる朝餉や春の泥

捨てらるる靴下被る春の草

春風の奏する波や島淡し

遊歩道歩きくねるや春の海

佐保姫や岩しやぶる波愛ほしむ

浜の音に草揺らぎけり望潮

踏青や風は岬を乗り上ぐる

春風を枕の竹や揺りの山

ほどけゆくとんびの糞や春霞

吹き出しのやうなあはは風光る

春の芝昼餉の父御呼ばれけり

海風や子らの散りぼふ春野かな

ドルフィンの蹴りで翔くるや春の鳥

鰐革の灘が春日を摺り下ろす

春風の拈る烏の天狗連

篁の座頭語りや春の鳥

春風の御成りの峠武者震ひ

菜の花の鎖を這はす行者山

日時計を買つて出る像春疾風

青屋根の烏は青し木の芽時

菜の花の隘路や風を開く駅

杉咲くや白波の散る島間

春禽の櫛の梢や海の風

古祠を打つ春風攀づる小山かな

梅の香の甍に隠る施無畏印

頂の奥津城に来て山笑ふ

春禽の詠歌発すや日矢の山

鉄船の波を喘ぐや島霞む

シャガールのラピスラズリや春の海

すり足の風に毛羽立つ春の潮

春分のあかりくらがり杉木立

分けて行くおほかぎろひの山路かな

草陰を曲がり切らざる春の風

山笑むや水を溺るる昼日影

女坂油菜小路引き返す

照り山へ長歌ひもとく初音かな

埋もれ谷春風遡上仕る

説呪曰無礙初音心大陀羅尼

千畳の春日一葉事切る

古草のひたすら照るや鳥の讃

山路行く木の芽が目なら恐ろしや

山門や大樹の影は春の風

大甕や馬銜に噛ませる梅太し

階の地蔵地蔵や目借り時

仏陀像囀りの織る糞掃衣

叩かれぬ鰐口の噛む春の闇

石畳光踏み塗る遍路かな

春泥と成り成る島や雨陀羅尼

昨夜の葉は身罷る魚や春の泥

水速し杖の嫗と菜花かな

白砂の呼ぶ姦しや海髪の夕

紅の花の首級や春の泥

春泥を噛む車輪かな軒灯り

毛氈や火之迦具土の陶雛

白蓮の花カルーセル五十路川

自転車の鉦の散華や春遍路

春浅し

久我　正明

ひそひそとナイショのはなし春浅し
豆まきや鬼を退治の豆の役
マラソンの眩しき足や二万本
店頭の幾何学模様春のチョコ
サックスのその色彩は木瓜の花
今日を待つて聞くバレンタインデー
長い髪を切つて私はフリージア
ご機嫌の春が鳴る鳴る駅ピアノ
ぶらぶらと春をながめる波頭
めじろ来てぱらぱら漫画のやうに去る

雛祭り

城戸　義文

待春や病魔にあらがふ友のベル
蕾あまた一輪開花沈丁花
昨夏の日照りに耐へし草青む
主なき邸の賑はひ梅椿
懐かしや四季の色分け雛あられ
見張る眼に雛のレジェンド勢揃ひ
児らの手に成る人形や雛祭り
驚きぬ音の大きさ春の雷
頭揃へやつと三寸黄水仙
唐揚げに舌の喜び春浅し（なにわや食堂にて）

花菜畑

井上　まり

佐保姫の連れ来し雨か比翼塚
雨粒をまとふ光や桜の芽
接骨木に芽や守り継ぐ比翼塚
池の面にゆらぐ人影水草生ふ
朝の日を隈なく集め花菜畑
空の青引き寄せ白き梅の花
たまづさを届けるやうに初蝶来
山茱萸の黄のつばらなる朝日影
野茨のこぞる芽吹きの古道かな
行く春のたはむれに引く恋みくじ

仲春

中矢えり子

春禽や美しき光の満つ朝
ドッグラン犬の足裏に春の泥
残雪や霊山覆ひ気を保つ
古びたる雛に赤きあられ餅
靴紐の踊り少年青き踏む
色どりの明し垂れ幕彼岸寺
魂の固まり上ぐや白木蓮
彼岸桜ぽつんと灯る岸辺かな
沈丁の香に昂ぶりの納めらる
ものの芽の膨らむ音や闇深し

花ミモザ

山口葉都緒

梅が香の圧にまみるる谷の宿
城山を浮かせて魅せる春の霧
足ゆするリフトの客や鼓草
たんぽぽに東雲色の風が吹く
花ミモザせせらぎの風きらめけり
山里の衍しきりや春の鳥
春泥や石の頭をけんけんぱ
蛇行する轍の川か犬ふぐり
初蝶来しばしふたりに割込みて
単線のホームの端につくしんぼ

落椿

福島　心結

総会は獺の祭や沓脱ぎ場
褪せぬまま錦糸の蕊や落椿
逆立ちて蜜吸ふ鳥や藪椿
蒼き踏むひとりぼつちの野辺の径
冴返る石の魚や目のぎよろり
霾や母校歴史の幕閉ぢる
百余年母校廃校春愁
花ミモザ幸せ色の風の中
陽炎や錆し鉄路のさきに夢
春の闇猫の寝息やあまやかに

獺祭

源　言鬼

漱石がゐて虚子がゐて獺祭（だっさい）

長閑（のどか）さやブラシに弛（だ）れる馬の面（つら）

春衣どこまで伸びる鼻の下

恵方巻おしやべり癖が邪魔になり

手ぐすねを引いて待ちけり鬼の豆

飛鳥の湯ページ重ぬる花椿

お返しに破産の覚悟バレンタイン

今年こそ覚悟を決めよバレンタイン

カルナバル騒ぐ嫗（おみな）の恋の虫

薄氷（うすらい）やメダカの顔を倍に見せ

☆花信風信

松山市　中矢えり子

地球温暖化の影響で、3月に雪が降ったりと異常です。北極の温暖化で、冷たい空気が南下するのだとか…。桜の開花予想も早くなったり遅くなったりと気象予報士も頭を悩ませています。とは言え、確実に暖かくなっていきます。花壇の花も次々と花を咲かせ、嬉しくなります。桜の見事な季節も、もうすぐですね。桜の名所の石手川公園の近くに住んでいるので、毎日桜を見に行きます。西行の歌「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」を、満開の桜を見る度に思い出します。桜が待ち遠しいこの頃です。

☆　松山市　山口葉都緒

いつもの様に歩きで松山城の天守広場の梅を見に行った。登りだけでもローブウェイでと思っていたが、連れ合いが身分証明書を忘れていたのでケチって歩く。天守閣に近いところの梅が紅梅、白梅とも満開で見応えがあった。遠足で来ていた園児と外国の人も多く訪れて賑わっていた。連れ合いの生まれ故郷の三津浜の海を眺めて下りにつく。途中、中学生と思われるグループとすれ違う。高校入試の二日目で終わった者が気晴らしに登っていたのかもしれない。尿意を覚えたのでローブウェイ乗り場のトイレで用を足していると、後ろに大勢の外国の方が並んできて出る物も出なくなってしまった。

紫竹集一句

篠笛の調べ流るや夜半の春　檜垣　勇慈

軒氷柱きのふと違ふ朝があり　髙井　辰美

蒼空や眉濃きままの紫木蓮　髙須賀潤緒

愛犬の尻尾も揺れる春一番　中井　康子

菜の花や歩む人生平凡に　得居　博秀

百歳の母と眺むる桃の花　松枝　ふみ

鹿尾菜刈る嫗の背なや朝月夜　天満　洋子

そよ風の置き土産なるすみれかな　大野つね子

紫竹集

【同人作品】

篠笛

檜垣　勇慈

点描となりしいばりや雪の果

リハビリに励む姿や春の空

蝋燭の短くなりて朧影

チクタクと柱時計や春の闇

帰り道春の匂ひに振り向けり

梅の香に誘はれ城を登りけり

篠笛の調べ流るや夜半の春

春北風や迫り来る火の見え隠れ

林道の轍に残る春の泥

畝立ての手を休めれば春の鳥

春の雪

高井　辰美

節分や一合五勺の豆を炒り

恵方巻彼方と貴方に御裾分け

赤い灯ゆらぐ寒波の交差点

大寒波三日三晩の赤い灯

南国や氷柱ののれん久に見ゆ

軒氷柱きのふと違ふ朝があり

バラバラに折れて氷柱でなくなりぬ

雪の夜の風のとびたる不安あり

百年を旅して繁る薮椿

落椿ひとひら乗せり庭の苔

紫木蓮

高須賀潤緒

夜干しする斜めから見る朧月

憂鬱の後押しをする春の空

夢並べ残りわづかの獺祭魚

忘却を友として生く春日向

六地蔵首に巻いてる春模様

瞬間知らず小さき揺れや落椿

箒目を流して行くや春時雨

蹴り上げて何処へ行くのかふらここと

蒼空や眉濃きままの紫木蓮

道後行車掌の指は春を差す

春一番

中井　康子

愛犬の尻尾も揺れる春一番
麗(うら)らかやバチを操るちんどん屋
タンポポや去年と同じ場所に咲き
雛の日やデイサービスの宴(うたげ)かな
十倍のポイント目当て春一番
春コート車移動の間に濃(のう)霧(む)
夫待つ犬とウトウト暖かし
春キャベツ丸ごと一個買はうかな
冴えかへる貧乏ゆすりやつてみる
姑(しゅうとめ)の通院介助春深し

菜の花

得居　博秀

表札に間違い無くとつばめ来る
万歩計歩数楽しむ日永かな
のどけしや畦(あぜ)で一服老夫婦
春うらら妻に手渡す感謝状
花冷(はなびえ)や残る人生おだやかに
車椅子轍(わだち)くつきり春の泥
じいちやんと呼ばれ振り向く春の風
風光る三津の名物渡し舟
葱坊主(ねぎぼうず)坊主頭も似合ふかな
菜の花や歩む人生平凡に

桃の花

松枝　ふみ

何処となくざわめく胸や春の宵
道化師の仮面脱ぎたる夜半の春
あまいもんおひとついかが春の月
教会の屋根三角や小米花
併せ持つ金眼銀眼や猫柳
記念碑の柔き文字かな春の雨
春の鳥遊ぶ水面の波光る
瓦版猫の恋路を仕立てをり
百歳の母と眺むる桃の花
初燕海辺の町に帰りけり

鹿尾菜刈る

天満　洋子

軍艦も客船も行く冬の瀬戸
身を縮め猫と朝寝や戻り寒
春近しつがひの鳶に雨を乞ふ
霜柱踏みしめ朝の野菜畑
鹿尾菜刈る嫗の背なや朝月夜
河川敷黒ジュウタンや鹿尾菜干す
礼服を脱がし摘み取る春みかん
安芸の国ベールで包み春霞
クシュンクシュン猫にもあるの花粉症
雛祭り一品持ちより寄る仲間

花すみれ　大野つね子

春うらら号令を聞き猫戻る

初もののつくしに笑顔昼の膳

添へられし菜の花の色明らなり

休眠の鉢一面にすみれ草

そよ風の置き土産なるすみれかな

花すみれ薄紫は母の色

一人では使ひきれずや春の時間

暖かや昭和百年きりの良し

愛媛　新聞

掲載日　3月　13日　「紫竹集」より　臺　（1月号）

冬北斗流浪の民の塒かな　松枝ふみ

手帳へと紅葉舞ひ散るひとひらを　井上杜子美

「うてな集」　より

吹き抜けの星をあげたる聖樹かな　藤田　菜々

掲載日　3月　21日　「紫竹集」より　臺　（2月号）

初詣二人と一匹とことこと　中井康子

春来たる車椅子から杖となり　得居博秀

「うてな集」　より

煤湯してご褒美ビール流し込む　戎井　風蓮

小西　昭夫　選　入選

掲載日　3月　8日

ゆく年くる年不安時に飲むくすり　久我　正明

掲載日　3月　22日

赤と蒼くるくる雪の散髪屋　久我　正明

臺　小　天　守

朝凪の川滑りゆく番鴨　西濵恵美子

脱ぐ靴や川と流れる春の星　西田　上酢

群れ降りる畑の一枚寒鴉　國米　慧子

ものの芽の吹き出る匂ひ里の山　野村　菫

冴返る飴玉のよりどりみどり　ミサキノバル

陽だまりの襟を広ぐや春セーター　成本　魚乃

春日記天気記号を習ひたし　藤田　菜々

やぶ椿鳴かぬ緑や枝を舞ふ　辛嶋　栖守

薄氷を負ひし緋鯉の来たりけり　佐藤　南山

三月や孫の旅立ち悲しかる　野本　末枝

固まりし絵具溶かして描く椿　舛岡　正弘

佐保姫の袖触れ行くや祭旗　青山鹿乃子

莟落つ椿もの憂き西日かな　萼　草子

清流に身浄め獺の祭りかな　今村　藤生

春泥や一歩一歩と手をつなぐ　戎井　風蓮

春泥の鼓動冷たきアスファルト　浜田　幸子

うてな集

広島県　西濵恵美子

朝凪の川滑りゆく番鴨

日を弾く汐入川や二月尽

説法は冬の星座の話から

子規の椿律の椿へ日の射しぬ

春光やスケートボードひるがへる

うららかやじんわり萎みゆく海馬

春の雨人絶えし家解かれけり

ふつくらと舞子のほほや梅ふふむ

広縁の日差しの中の雛かな

うつし世の混沌に置く立ち雛

パラオ　西田　上酢

脱ぐ靴や川と流れる春の星
春へ来しうれし涙のプルメリア
胃袋にせせらぎ麦の青(あお)む方
歌に似て話し声かな桃の花
雌蛭(めひる)木の杖に花咲く潮(しお)干(ひ)潟(かた)
いしぼたん水をあがれば鼻のきく
にはとりにひよこを足して春の顔
王国の蜂太陽の入れぼくろ
永き日やイランイランの花に鼻
白波をはなれて鳥のつるむかな

松山市　國米　慧子

群れ降りる畑の一枚寒鴉(かんがらす)
独り聴く昭和歌謡や朧の夜
寝返りや春の風鈴何処(いずこ)より
他所(よそ)の様な石鎚(いしづち)山系(さんけい)春の雪
春寒(はるさむ)や足踏みしつつ電車待つ
孫からの写メ全面の春の雪
一日の日差し逃さぬつくしかな
川堤(かわつつみ)物を探すはつくし摘み
手の平を返すが如く春来たる
闊歩(かっぽ)する流行色や春来たる

大阪府　野村　菫

ものの芽の吹き出る匂ひ里の山
春の雨飢ゑしものへ和らかし
待ちをりし今朝のデビューやいぬふぐり
里山は霞のベール包まれむ
朝霞瞑府の渕を歩きけり
目瞑れば雪原をゆく汝が列車
春の雪飲み鉄の汝と列車旅
豆皿にあられこんもり卓の雛
しじみどうでつしやろ媼の声や京の朝
よく笑ふ双子姉妹や桃の花

東京都　ミサキノバル

冴返る飴玉のよりどりみどり
転生へ獺魚を祭りけり
煎餅の塩味の軽し春火鉢
焦点は椿の蕊へ一途かな
合掌の列の途切れず草青む
春融の玻璃工房のケーキかな
歯の欠くる格闘家かな春の波
潮騒の学舎の痕うららけし
壺焼や転任を迷ってるんだ
甲板へ春セーターの膨らめり

松山市　成本　魚乃

陽だまりの襟を広ぐや春セーター
波紋消ゆ獺の祭や尾のつたふ
解き放つ魔女の一撃春の風
遠巻きの囀り満ちるエコーなり
直土の湿す椿を抱きにけり
押入れの皿を起こすや春の夜
真夜中のチョコシュー頬張るバレンタイン
カールするまつ毛に添ふや朧月
一輪に陽の透りけり金鳳花
かけ違ふもどかしさかな春の服

松山市　藤田　菜々

春日記天気記号を習ひたし
窓際の野菜再生風光る
東に咲く梅の香の届きけり
瑠璃並ぶ獺の魚の祭りかな
掃除機の修理断念二月尽
珈琲の豆挽く音や山笑ふ
菜の花や活けて窓辺の花となす
朝日浴ぶ空地啄む春の鳥
春の鳥まめについばむ野草かな
鷹化して鳩と為る日や虚ろな目

東京都　辛嶋　栖守

やぶ椿鳴かぬ緑や枝を舞ふ
大正の父の大志に落椿
シチナラべや獺祭に学び視よ
獺祭る音符にも魚にも
獺祭や宇宙醸造きばう満つ
自販機の陰探る身や春浅し
父の忌に咲く春蘭や母遺し
リフトから違ひの分かる春の雪
いつもの日いつもの草野蕗の薹
紅梅や墨三色で描きあげし

東京都　佐藤　南山

薄氷を負ひし緋鯉の来たりけり
水温む上目遣ひの緋鯉かな
春泥を育む水の命かな
春泥は野積の石を囲ひけり
春泥の弾あやまたず打ちにけり
夕暮れの枝鎮まれり春の鳥
幾たびも鷺の澄み声朝の空
芽吹きたる千鳥ヶ淵の孤舟かな
冴え返る千鳥ヶ淵や昼の酒
転寝のやをら目覚めり春の雪

松山市　野本　末枝

三月や孫の旅立ち悲しかる

卒業の姉と弟成長す

畑焼くや山林火災の大惨事

沈丁花香りの強さピンク白

蕗の薹天プラにすにが味あり

田舎墓地線香香る彼岸桜

彼岸桜先祖参りの墓地に咲く

公園にぽつりと赤い落椿

掃き寄せて根元に列し落椿

落椿水槽に浮かべて眺めけり

松山市　舛岡　正弘

固まりし絵具溶かして描く椿

古稀過ぎて昔恥るや浮かれ猫

水温む今朝も只々豆腐寄す

壬生菜買ふ沖田総司の影慕ふ

老犬の最期の春やリード引く

一握の思ひのずれる春隣

インスタに上げたき獺祭未だ見ず

東京都　青山鹿乃子

佐保姫の袖触れ行くや祭旗

扁額は梅の一文字梅の寺

杣山をねぎらふ雪の別れかな

春泥の長靴並ぶ赤黄黒

春鳥の上枝に広ぐ無垢の空

星の屑飲む蛤の夜鳴きかな

橋の上鳶掠めゆく春ショール

神奈川県　　萼　草子

莟落つ椿ものうき西日かな
椿添ふ将門塚の乙女かな
空港の獺の祭や駐機場
獺祭や金平糖は缶の底
紫立つ節分会かな黒豆茶
立春大吉地蔵微笑む社務所口

東京都　　今村　藤生

清流に身浄め獺の祭りかな
せせらぎに鳥歌ひけり獺祭
己が儘咲きて落ちけり藪椿
落椿ガラシャの如く時を知り
二月の木朝日の中の花芽かな
大声の歌ふ幼子花芽萌ゆ

松山市　　戎井　風蓮

春泥や一歩一歩と手をつなぐ
足あとを辿つて進む春の泥
庭木揺れ常連客の春の鳥
春の鳥見守りされる庭いぢり
日曜日出不精になる春の雨

広島県　　浜田　幸子

春泥の鼓動冷たきアスファルト
春禽や初めの仕事に一声す
やんはりとページをめくり春の雪
春の鳥それはもう恋じやないかしら

パラオ便り「大晦日」

西田　上酢

私が住んでいる家の大家さんは96歳のケティーさんというパラオ人の女性で日本語を話すことができます。車椅子に座り、玄関の前でよく日向ぼっこをしています。先日大晦日の日でしたが、ケティーさんを見かけたので、今日は大晦日ですねと声をかけると、耳が遠いので、もう一回言ってくれと言いますと、こちらをしばらく見つめるケティーさんの瞳に涙が湧いてきて、「嬉しいです、久しぶりに聞きました。」と言われました。

ケティーさんの学生時代は日本統治時代で、みくそのの思出話をしたくれます。日本人の厳しくて大変だが、当時日本の男子生徒は恋話をのん方が多いので雰囲気も時々日本語にしたがすし方てい たような恋題材ジオ語をあ。ケてイ ーさんとの今とラ人が家に流れ歌ま せ出入りケ ティーさんは大家族で、いろんな

言葉のこよみ
「苗代（なわしろ）」「苗代田（なわしろた）」「苗田」

城戸　義文

晩春の季語に「苗代」があります。

水に浸しておいた籾種をまいて、稲の苗を育てる水田を「なわしろ」と言いました。「なわ」は「なえ（苗）」の意で、（e音がa音に変化。「かね」→「かな」「かねづち」→「かなづち」、「たけむれ」→「たかむら」等）、「しろ」は田地の意と言われています。伊予の方言では「なわしろ」を「のしろ」「のーしろ」という所がありました。伊予市の山間地に住んでいた私の母方の祖母は「のしろ」と言っていました。

春まだ浅い頃、「なわしろ」にする田を耕し、土塊を細かくします。この作業を「なわしろごしらえ（苗代拵え）と言いました。そしてそこへ水を引いて、種籾を播きますが、それに適した時期を「なわしろどき（苗代時）」といい、地域によって異なりますが、四、五月頃でした。その引き入れる水を「なわしろみず（苗代水）」と言いました。『萬葉集』には次の歌があります。

言出しは誰が言なるか小山田の苗代水の中淀にして〈初めに言い出したのは誰の言葉でしたか。山の田の苗代の水ように途中で言い淀んだりして〉

（巻四　紀女郎（きのいらつめ））

平安期の『金葉和歌集』には、次の歌があります。

山里の外面の小田の苗代に岩間の水をせかみ日ぞなき〈山里の外側にある小田の苗代に、岩間を流れる水を堰き止めて入れない日はない〉

（藤原隆資）

苗代の水を霞はたなびきて打樋のうへに掛くるなりけり〈霞は空にたなびいて、苗代に引く水を通す長くかけ渡した樋の上にかけていることよ〉

（西行）

鎌倉期の『新古今和歌集』には次の歌がありま

す。

雨ふれば小田のますらをいとまあれや苗代水を空に任せて〈雨が降るので、田の農夫は暇があることよ。苗代に引く水を濯(そそ)ぐのは空に任せて何もしないのだから〉　（勝命法師）

近世の歌では、

なはしろにしめひきはへて引水のゆたかなるにぞ年はしるしも〈苗代に注連縄を長く張って、引いてきた苗代水が充分なことから、今年の豊作ははっきりしている。〉　（田安宗武）

俳句では

苗代に老がちからや尻たすき　服部　嵐雪
苗代やうれし顔にもなく蛙　森川　許六
苗代や四方におさまる水のえだ　椎本　才麿
苗代や隠居へ行きて手をつかへ　上島　鬼貫
苗代や二王のやうな足の跡　志太　野坡
水澄て籾の芽青し苗代田　炭　太祇
桜散る苗代水や星月夜　与謝　蕪村
宵月や苗代水の細き音　黒柳　召波
苗代やある夜見そめし稲の妻　高井　几董
苗代や親子して見る宵も雨　小林　一茶
市中や苗代時の鯰売　正岡　子規
苗代にひたく飲むや烏猫　村上　鬼城
この里の苗代寒むといへる頃　高浜　虚子
凧の尾のそろりと下りぬ苗代田　佐藤　紅緑
妹がかぶる手拭白し苗代田　寺田　寅彦
苗代床浮くばかり降るさ中かな　大須賀乙二
苗田の日雨こまやかやゆすらうめ　飯田　蛇笏
我たのむ苗田小ひさし天が下　長谷川零余子
苗代や蛇を見し眼の曇りさめず　林原　耒井
苗代や逆さに吊りし鴉の羽　長谷川かな女
しるきもの苗代水や夜道して　尾崎　迷堂
うつくしや扇つくりの苗代田　山口　青邨
苗代に落つ一塊の畦の土　高野　素十
苗代の密なる緑いつまでぞ　西東　三鬼
なつかしや苗代水に畦とぎれ　中村　汀女
鵯鳴くや大雨となりし苗代掻き　金尾梅の門
押し入れに日のさしこめり苗代時　永田　耕衣
稀に書く本名優し苗代田　中村草田男
苗代にいのち噴かざる籾が見ゆ　山口　誓子

みちのくの苗代の辺にその寒さ　皆吉　爽雨
苗代のやみやさそりの星いでて　百合山羽公
われが見て苗代作りわれを見ず　相馬　遷子
田の朝の苗代寒の靄おりて　長谷川素逝
苗代や抜くたび白む農の足　石川　桂郎
脛掻いて痕しろくなる苗代寒　能村登四郎
雪嶺の覗く苗代かぐろしや　石田　波郷
苗代にかげを落してよるの雲　川本　臥風
苗代に音なし旅の吾等過ぐ　沢木　欣一
苗代に深く大きく足跡澄　伊丹三樹彦
一枚の大苗代田歪みをり　清崎　敏郎
苗代の密の苗読み眼をいやす　上田五千石
苗代寒さそへる雨となりにけり　稲畑　汀子
もてあます首の長さや苗代寒　宇田喜代子
苗代に歳々の顔うつし老ゆ　大串　章

などが見られます。

鎌倉時代の説話集『古今著聞集』にこんな話が載っています。現代語で粗筋を述べます。

「（平安時代の歌人で、三十六歌仙の一人）能因法師が伊予の守藤原實綱と共に夏の初めに伊予の国に下ったところ、長い日照り続きで、稲が枯れかかり、人々は大そう嘆いていた。伊予の国司は能因法師に向って、『神様は和歌に感動賞美されます。どうか試しに（雨乞の）歌を詠んで、大三島の大山祇神社に奉納なさってくださいませんか。』としきりに頼んだので、次のように詠んだ

天川苗代水にせきくだせ天下ります神ならば神

と、その歌をお供えの紙に書いて、宮司を通して奉納したところ、炎旱の天気が俄に空一面かき曇り、やがて大雨が降ってきて、枯れかかっていた稲が皆葉を青々とした姿に蘇った。」

「苗代水」とありますから、苗代田で育っている田植えの前の稲だったのでしょう。

現在は苗代がほとんど見られなくなって、籾をまき苗に育てる作業は、機械化が進み田植機に合うサイズのパレットに籾を播き、かつて苗代で育てたほど生長させないで、機械の操作に適合する大きさで田植えに供する苗の育て方が一般的のようです。したがって苗代に入り、苗

を抜き取り、束ねるといった作業は見かけることがほとんどなくなりました。
「苗代」「苗代水」などの季語はもう俳句の世界から消えてしまうかもしれません。

※先月号の訂正がございます。
暁剪る名「はつあらし」白椿　吉野　義子
「義子」が「義十」となっておりました。訂正をお願いいたします。

☆ 令和七年2月号から 私の共鳴句

頬被似合ふ齢となりにけり　檜垣　勇慈

面白くて笑ってしまいましたが、くり返し読むと不可解な気がしてきました。「〇〇が似合う年齢」の、〇〇を色々想い浮かべてみると、頬被は想定外です。農作業の時などになさるのか、若しくは頬被という季語の珍しさに使われたのか。さらにくり返して読むと、何か作者の自覚、ひいては覚悟のような気配がしてきました。頬被には、知っていながら知らないふりをするという意味もあります。どうでもよいような周りの事に知らないふりをして、自分の道を一直線に進んで行く作者の姿が見えて来ました。

【鑑賞・青山鹿乃子】

いい予感託す伊予柑受験生　天満　洋子

受験シーズンになると神社等で合格祈願の親子で賑わいます。当地でも中江藤樹さんが立ち寄ったとされる太宰府天満宮分社があり合格祈願のお札が沢山奉納されています。伊予柑は新品種に押され生産量が減少していますが根強い人気があります。受験生はいよかんを食べていいよかんが当たり見事合格した事と思います。これからも伊予柑栽培に精をだしなさいと教示されました。

【鑑賞・得居　博秀】

冬麗の風へ与へる帽子かな　箱蔵　剣

冬の麗らかな風に、作者の近くにいた女性の頭から広いつばの帽子が何の抵抗もなくふわっと離れてそのままその風に乗って飛んでいってしまっている。その自然な光景を、作者は「風に帽子を無理矢理取られた」ではなく「風に自ら帽子を与えた」と、被害の受け身ではなく自主的な行為に見做し

て詠んでいる。アルプスの少女ハイジのアニメの映像や映画サウンド・オブ・ミュージックのオープニングの映像を見るような気がする美しい句である。

【鑑賞・源　言鬼】

アスファルトの割れ目に満ちる初日かな　久我　正明

掲句は、「アスファルトの割れ目」という耐用年数を過ぎたアスファルトで舗装された路面のひび割れた部分に焦点を当てることで、路面の隅々まで初日に照らされているという景を部分と全体の関係で詠んだ提喩句と考えられる。加えて、アスファルト舗装は路面の「化粧」であるから、「ひび割れ」と結びつくと諷喩的解釈（一つの事象を別の事象に置き替えて描写する喩法）も生まれうる。しかし、それを文言にすることはタブーであるからよしにする。言鬼危に近寄らず！

【鑑賞・源　言鬼】

一山の凍て背負ひたる道祖神　井上　まり

道祖神は、村境や峠に鎮座する石像や陰陽石で、外来の疾病や悪霊を防ぐ神であったり夫婦和合の神であったりする。作者が目にした峠に佇む道祖神は、前者であろうが全身が薄氷に覆われ、そのお顔には氷柱が下がっている。そのお姿は、まるで一山の冷気をその一身に背負い、お山とそれに連なる里を寒冷から守っておられるように見えると作者は詠む。素朴で庶民的な外見の道祖神が、神々しく映る一句。

【鑑賞・源　言鬼】

指先に寒さ集めて息を吐く　髙須賀潤緒

寒さは指先に堪える。冷えた手指を少しでも温めようと、指先にハーッと息を吹きかけながら両手を擦り合わせると、首肩に力が入る。そして、自ずと両脇が閉まり両肩が上がる。温泉にでも浸かって、指先どころか全身を温め、湯上がりに、「朝日」の鍋焼きうどんでも食べたくなる一句だ。

【鑑賞・源　言鬼】

おい倅真似してみいや猫の恋　得居　博秀

雄の恋猫はあたり構わず「アモーレ！アモーレ！」と大声で目一杯自分の恋心をお目当ての雌猫にぶっつける。しかし、その雌猫を狙っているのは彼一匹ではない。彼は他の雄猫との戦いに勝ち抜かねばならない。掲句は、作者が、息子との晩酌の膳で発した「そんなことがお前はできるか。倅よ、やれるものならやってみな」という揶揄いと挑発の文句を句にした滑稽句。そう言えば、「猫はいいわ

よね。自由に恋ができて。結婚なんかに縛られなくて。死ぬまで恋をしなきゃねえ」なんておっしゃるご婦人もいらっしゃる。人生１００年ですぞ。しがらみのない方は、プラトニックでも片想いでも結構。恋をすればお肌の艶が良くなりますよ。猫に負けずに恋をなさっては、いかがですかな！

【鑑賞・源　言鬼】

なよ竹に媛ゐるごとき冬日ざし　箱蔵　剣

『竹取物語』の一場面を彷彿させる一句だと思います。「なよ竹」は「しなやかな竹」という意味ですが、物語ではかぐや姫が成人（十二。三歳でおかっぱ頭の髪を結い上げ後ろに垂らす）の儀式をし、さらに裳を着せる儀式をします。そして斎部（いんべ）のあきたという人に頼んで付けた名が「なよ竹のかぐや姫」でした。華麗で美しくしなやかな姿に因んだ名のようです。

掲句では、黒く重たい雲に覆われ北風に見舞われる冬の天候、そんな中の竹群、すると突然雲間から現れた太陽、その光を受けた竹の輝きは、あたりを明るく包み、竹を黄金色に染め、しなやかさを生み出した。竹の中にかぐや姫のような人物がいるのではないかと思ってしまった。そんな光景が浮かびました。「姫」ではなく「媛」としたのは「愛媛」の竹にうまれた「ひめ」として表記されたのではないかと推測します。中七の措辞が冬日の明るく暖かい輝きを表す効果抜群だと思います。

【鑑賞・城戸　義文】

久我正明の部屋　78

年末から食事が半分しか食べられなくなりました。胃内視鏡検査をしてみると胃潰瘍が見つかりました。そして薬を飲むようになりました。治療１０日めからは食事は普通に食べられるようになりました。

胃潰瘍もかなり改善してきたのかも知れません。胃潰瘍はピロル菌が関与していることが知られています。私にもピロル菌がありました。ピロル菌は抗生剤２種類と抗潰瘍剤を一週間飲めば、胃潰瘍の再発はないそうです。除菌できれば、まだ始めていませんが近日中に行います。除菌治療は私はかってアミノインデックスという検査をしたことがあります。この検査は将来癌になる確率を教えてくれるというものです。これによると私は胃がん、肺がんになる確率はゼロです。大腸がん、前立腺がんになる確率も０．０３～０．０４％です。ほとんど癌にならないと評価されました。これをみると、将来癌

に健康的と思い、成人病検査をかねていきます。

性病気が無くて盲腸病検査をさえ最近はたまに血管病気になること当然ピロリ菌を持っていれば胃潰瘍になるこのは胃潰瘍ではなくて、他の様々な病気はかなり恐ろしいものです。

ついの限り分からない病気突然肺病気なのは癌にかかるのです。

あいとて定期的に働きたいので、それまで病気にかかりやすいのです。

5～6年はにしてはじめて健康診断をしたことがあります。

開返り2月9日（日）に松山を出発し、北条を折り返し高縄山にして松山をゴールとするマラソン大会がありました。

そのもだしラつ　のは　開返

マラソンでは雪が積もっていましたが、この日のはじめは寒い風は無く、時々陽が差す絶好の日和になりました。

私努絶けかをよ私マそ高かし2
は力えでし抱うもラれ縄れと月
こに絶し、えに沿ソま山まし9
のに感えた私てな道ンでにして日
ようし心に歩が応るに日のはた松
な体まい健見援べ出のはた。山
力す脚付援く て寒雪。を
はもてけしま人応雪が
もとくらまし の援積
なる人れた。いをもっ
く、も知ない しまて
高駆り場 た。いま
校けい合所 走 ま
の抜いに 者 し
人けの出 に た
マるの て 目 が
ラ人人 カ 立 、
ソや や メ て こ
ン選 ２ ラ の
手息人 ソ 日
選 マ
ばれたこともあります。

ゴールに松山を出発し、北条を折り返し高縄山にしてはじめて雪が積もっていましたが、この日のはじめは寒い風は無く、時々陽が差す絶好の日和になりました。

私は努力に絶えた。健脚を誇って駆け抜ける人やスポーツ選手息子さんに会ったこのように心歩いてくるもいてマラソンの選手に選ばれたこともあります。

長距離走では後ろの方をほぼ歩いて帰りました。

ただ短距離走では選手に選ばれたことが、成績は平凡でした。

元気で聞こえなくなったという85歳の男性が来て聴力検査をすると左右とも50dbほどの難聴でした。右耳は鼓膜は正常ですが、左耳の鼓膜は中等度の大きさの鼓膜穿孔が見られます。

少しでも聴こえるようにしてあげないと満足して帰ってくれそうもなかったので、姑息的な治療法ですが、穴が開いている鼓膜に、書道用の半紙を鼓膜穿孔の大きさに合して切ったものを貼り付けてあげました。これで、少しは聞こえが良くなりますか？」

「こうですか？」

「さっきよりは聞こえますか？」

「はい、元気ですかあとはこれ帰りなさいたばかりの頃に来たお父さんに会ったあとはこのとおりです。」

「私ても帰りながらあすかそますうすこしこて帰り際に突然「お父さんに言われました。」

「私ずそ時思ッフまそれを聞いて、完全に勘違いしてぶを取ってる年を取ってるのは誰にも言われます。そのもだしラつ　のは　開返

「のは時私ずそ私てこのとタッフまそれを聞いて、完全に勘違いしてぶを取ってる年を取ってるのは誰にも言われます。そのもだしラつ　のは　開返

「私つ言よはぶそいつうとはだんがいなそるスたたあすかそますうすこしこて帰り際に突然「お父さんに言われました。」

令和七年二月号
共鳴五句

高須賀潤緒　選

飛び石や天地に迫る冬紅葉　久保　言鬼
空の果て睦み合ひけり寒昴　佐藤　南山
赤き実を枯野に咲かせ魔女の杖　西濵恵美子
老いの身も気持改め年迎ふ　野本　末枝
指先で摘めば消ゆる初氷　檜垣　勇慈

天満　洋子　選

木々眠る地に降り注ぐ凍てし月　中矢えり子
吉凶は心に納む初御籤　福島　心結
足踏みでバス待つ人や寒の入り　松枝　ふみ
畳打つ音して婆の歌かるた　野村　菫
流木の傷の深さや去年今年　佐藤　南山

源　言鬼　選

冬麗の風へ与へる帽子かな　箱蔵　剣
アスファルトの割れ目に満ちる初日かな　久我　正明
一山の凍て背負ひたる道祖神　井上　まり
指先に寒さ集めて息を吐く　髙須賀潤緒
おい倅真似してみいや猫の恋　得居　博秀

檜垣　勇慈　選

刃の薄き母の包丁なづな打つ　青山鹿乃子
東京のおでんをつつくスパイかな　ミサキノバル
初空へトランペットの河川敷　野村　菫
幣の風頭に受くる淑気かな　國米　慧子
谷川の音なほ細り寒に入る　井上　まり

山口葉都緒　選

人混みも売り出しもなく町師走　青山鹿乃子
廃線のレール跨ぎし小春猫　辛嶋　栖守
ジュピターを伴ひ上る冬の月　今村　藤生
病室の窓から見ゆる初日の出　髙橋　福音
我が家には何にも無くて嫁が君　戎井　風蓮

野村　菫　選

白鳥の首鳴きあふ濡れ睫毛　箱蔵　剣
初転び良き運を得て怪我もなし　大野つね子
独りと云ふ心やすさよとろろ汁　髙井　辰美
初詣二人と一匹トコトコと　中井　康子
春セーター今度の句会はこの色で　得居　博秀

松枝　ふみ　選

影の無き滑り台かな雪こんこ　箱蔵　剣
笹鳴きや暗がりに打つ火打石　山口葉都緒
古釘に掛ける大きな新暦　髙井　辰美
音割れて海は鯨と持ちあがる　西田　上酢
流木の傷の深さや去年今年　佐藤　南山

朝霜の土手一斉に輝きけり　中井　康子　選
遠鳴りの潮の寄せる海鼠かな　野村　菫
足向ける吊席オリオン回りけり　西田　上酢
けたたましサイレン走る十二月　成本　魚乃
人混みも売出しもなく町師走　藤田　菜々
　　青山鹿乃子

蠟梅の泡の朝日溜まり哉　佐藤　南山　選
参道の日差しを跳ねて寒雀　箱蔵　剣
手枕の猫の寝息や冬温し　井上　まり
指先に寒さ集めて息を吐く　天満　洋子
刃の薄き母の包丁なづな打つ　髙須賀潤緒
　　青山鹿乃子

去年今年血圧計を友として　髙井　辰美　選
谷川の音なほ細り寒に入る　城戸　義文
鏡餅開くや居間の呪文解け　井上　まり
朝霜の土手一斉に輝きけり　中矢えり子
空の果て睦み合ひけり寒昴　野村　菫
　　佐藤　南山

頬被似合ふ齢となりにけり　青山鹿乃子　選
大量の魚を捌く二日かな　檜垣　勇慈
音割れて海は鯨と持ちあがる　中井　康子
降誕祭入所の母の赤帽子　西田　上酢
我が家には何にも無くて嫁が君　今村　藤生
　　戎井　風蓮

なよ竹に媛ゐるごとき冬日ざし　西濵恵美子　選
参道の日差しを跳ねて寒雀　箱蔵　剣
警官も並ぶたこ焼冬日和　井上　まり
音割れて海は鯨と持ちあがる　福島　心結
払ふもの内より出づる煤湯かな　西田　上酢
　　青山鹿乃子

影のなき滑り台かな雪こんこ　西田　上酢　選
旅支度寒夜は雷を包みけり　箱蔵　剣
ゆく年くる年不安時に飲むくすり　箱蔵　剣
寒風や胸いたはりつ湯を歩く　久我　正明
煮こごりの目玉澄みたる夜更けかな　久保　言鬼
　　松枝　ふみ

山茶花の牢屋に鳥を入れにけり　辛嶋　栖守　選
海原の千々の光りや初日の出　箱蔵　剣
手弁当ラジオ相手のみかん山　井上　まり
毛帽子の浅き被りの括れけり　天満　洋子
飛石の歩幅の狭き石蕗の花　ミサキノバル
　　藤田　菜々

菜箸を置く折紙や初座敷　國米　慧子　選
音割れて海は鯨と持ちあがる　ミサキノバル
冬枯れの庭にピンクの花ひとつ　西田　上酢
けたたましサイレン走る十二月　野本　末枝
間違へてサイズ違ひの注連飾　藤田　菜々
　　髙橋　福音

一帖の風に巻きけり冬の星　箱蔵　剣
年惜しむ足湯に足を撫でられて　久我　正明
一幅の紅白梅や年新た　井上　まり
閑けさの際立つ山家寒椿　山口葉都緒
初御空鳶悠々と輪を描く　福島　心結

中矢えり子　選

日脚伸ぶ光の絡む足湯かな　箱蔵　剣
参道の日差しを跳ねて寒雀　井上　まり
吉凶は心に納む初御籤　福島　心結
二枚めは長き追伸冬の夜　髙須賀潤緒
手枕の猫の寝息や冬温し　天満　洋子

今村　藤生　選

初詣吾の前をゆく異邦人　山口葉都緒
うそ寒や一人暮しの家広し　髙井　辰美
おつちやんのあたつていけと焚火かな　野村　菫
おすすめはホットコーヒー生姜入り　藤田　菜々
散歩する犬もマフラー巻かれたる　西濵恵美子

末枝　選

なよ竹に媛ゐるごとき冬日さし　箱蔵　剣
谷川の音なほ細り寒に入る　井上　まり
寒風や胸いたはりつ湯を歩く　久保　言鬼
顔浮かぶ今年限りの賀状かな　檜垣　勇慈
冬雲の斑の間日差しあり　藤田　菜々

城戸　義文　選

余韻一滴

「紫竹集」作品抄　中矢えり子

「うてな集」作品抄　山口葉都緒

全作品抄　箱蔵　剣

「二月号」作品抄　西田　上酢

紫竹集より（中矢えり子）

篠笛の調べ流るや夜半の春　檜垣　勇慈

篠笛は日本古来の横笛で篠竹から作られています。澄んだ音色はリラックス効果もあります。夜、篠笛を聞いた。心も体もゆったりとして春の気配も感じられた。と掲句は述べています。義経も吹いた篠笛。日本人の心にささりますね。素敵な春の一夜でしたね。

軒氷柱きのふと違ふ朝があり　髙井　辰美

強烈な寒波に襲われた日、氷柱が軒下に現われた。平凡な日常を壊す出来事に、大変驚いた！と掲句は言っています。昨日と同じ朝を送っていたのに、昨日と違う朝が来るなんて…。と。自然変化は突然やってきますね。でも軒下に氷柱なんて、とても羨ましい。光に当たりキラキラ輝き美しい事でしょう。

蒼空や眉濃きままの紫木蓮　髙須賀潤緒

美しい空と美しく空に伸びる紫木蓮の景が目に飛び込んでくる掲句です。葉に先立って、六弁の花を咲かせる木蓮。とても目立ちますね。外側は濃い紫で、内側は白く、とても美しい花です。掲句はそれを、眉濃きままと表現。女性らしい捉え方でユニークです。青い空を蒼空としたのも美しさを強調しています。

愛犬の尻尾も揺れる春一番　中井　康子

立春後、はじめて吹く強い南寄りの風のことを春一番と呼びます。立春が来て、暦の上では春だけど…と思っていると、暖かく強い南風が吹いてきた。嬉しい気持ちでいると、以心伝心、愛犬も嬉しそうに尻尾を振っている。心がほっこりする掲句です。動物も、飼い主の感情を敏感に共有しますね。

菜の花や歩む人生平凡に　得居　博秀

野に立つと、菜の花が春の陽ざしを受けて黄色にピカピカと光っている。ただそれだけだけど幸福感に満ちてゆく。これから先もちょっとした季節の変化に気づき、平凡な暮らしが続いていけば良いなあ…と思われた。黄色の光に包まれ、幸福に佇む作者が見えてくる掲句です。

百歳の母と眺むる桃の花　松枝　ふみ

百歳を迎えられたお母様。おめでとうございます。また、そのお母様と一緒に桃の花を眺められている作者も…喜ばしいお二人です。なかなか稀なことですね。羨ましいです。桃の花は愛らしく優しい形状で、掲句にピッタリの季語です。お二人の笑顔が見えるようです。

鹿尾菜刈る嫗の背なや朝月夜　天満　洋子

鹿尾菜は年一度、春に収穫されますが、朝早く干潮の時に行われる、厳しい作業と聞いています。黙々と作業されている老女の背中。まだ明けきら

ぬ空には、月がかかっている。厳しいけれど、美しい光景ですね。自然と対峙されて生活されている姿は、厳かな感じがします。

そよ風の置き土産なるすみれかな　大野つね子

休眠の鉢にいつのまにか、すみれが咲き始めた。どこからか種が飛んできたのでしょう。かわいいすみれに心癒やされる作者。そよ風の置き土産という措辞が、とても優しく心に残ります。自然の営みには驚かされますね。特に花は心癒やされます。雑草の小さな名も無き花にもほっとしますね。

うてな集より（山口葉都緒）

朝凪の川滑りゆく番鴨　西濵恵美子

川の流れのようにという歌を思い出し河口の景が浮かんだ。番鴨は作者ご自身を重ねられたか。

脱ぐ靴や川と流れる春の星　西田　上酢

一日の仕事を終え靴を脱げば、空には疲れも身も心もきれいに流してくれそうな、春の天の川。

群れ降りる畑の一枚寒鴉　國米　慧子

餌にありつく為か、天敵から身を守る為か、春のペア探しなのか、鴉に尋ねてみたくなりますね。

ものの芽の吹き出る匂ひ里の山　野村　菫

草木が芽吹く時、それぞれの種ごとの匂いが有る様に感じる。芽も里山も想像も膨らんでゆく。

冴返る飴玉のよりどりみどり　ミサキノバル

寒さがぶり返すと空気も乾燥する。であれば飴玉が選りやすい。下句のみどりで春がふかまる。

陽だまりの襟を広ぐや春セーター　成本　魚乃

服選びに悩む季節。予報を見て春セータに決めたが、陽だまりで襟を広げる羽目になてしまった。

春日記天気記号を習ひたし　藤田　菜々

家事も何事も手早い作者。日記を付けるのも天気記号を使えば素早く書けると考えられたか。

やぶ椿鳴かぬ緑や枝を舞ふ　辛嶋　栖守

藪椿に来ている小鳥を見ている作者。鳴くことを忘れ夢中で蜜を吸っているのは目白だろうか。

薄氷を負ひし緋鯉の来たりけり　佐藤　南山

一般的に冷水の中で鯉は動かないとされているが、自分の気配に緋鯉が近寄ってきた驚きと喜び。

三月や孫の旅立ち悲しかる　野本　末枝

お孫さんとの別れは色々な感情が込み上げることでしょう。作者は素直に悲しいと詠まれた。

固まりし絵具溶かして描く椿　　舛岡　正弘

作者の眼には椿の色は見る度に微妙に違って見えるのでしょう。納得の椿にするため頑張る作者。

佐保姫の袖触れ行くや祭旗　　青山鹿乃子

いままではためいていなかった祭旗が動いたのに気付いた作者。佐保姫が通ったからだと感じた。

莟落つ椿ものうき西日かな　　萼　草子

椿が莟のまま落ちたのでしょう。開いている椿も気持ちを重ねている作者も西日のなかに立つ。

清流に身浄め獺の祭りかな　　今村　藤生

祭に関わる人々は普通身を清める。獺祭に関わる人は獺が棲んでいた清流で清めるのが自然か。

春泥や一歩一歩と手をつなぐ　　戎井　風蓮

春泥のなかを転ばぬように、お互い手をつないで慎重に歩く。仲間と手をつなぎ歩く様子が輝く。

春泥の鼓動冷たきアスファルト　　浜田　幸子

春泥の道は歩きにくいが生きている様に感じる、それに対しアスファルトの道は歩き易いが硬い。

無双集より（箱蔵　剣）

今日を待つて聞くバレンタインデー　　久我　正明

勇氣がないかそれとも相手を試しているか。どちらにしても初春の寒さに微細に光りを投げかける心を感じる。職場か家族か。人間関係の遠慮と親しみのはざかいの風情を語る。

昨夏の日照りに耐へし草青む　　城戸　義文

こうゆう大胆な作句法はなかなか見られない。季語は下五に据えられているが。上五中七の感慨の中に過ぎ去った季節の季語が二つある。コロンブスの卵のような一句。「昨夏」は「さくなつ」の読みに格調が漂う。草への労（いたわ）りの心はそのままご自身への労（ねぎら）でもある。

「耐へし」の「し」はこういう風に使う語である。かなり時間をさかのぼった昔を言うときに使う言葉である。「蝶飛びし頭上」のような、たった今起こったことには使わないようにする。この「蝶」も大昔に飛んだことのように読むということになる。

たまづさを届けるやうに初蝶来　　井上　まり

「たまづさ」は枕詞にもある。枕詞「玉梓（たまづさ）の」は「使（つかひ）」「妹（いも）」に掛かる。「たま（玉）」は霊的神聖であり、人の言葉を伝える使者が梓（あづさ）の杖を持っていたことから来ている言葉という。「妹（いも）」は男性が妻や恋人を呼ぶ親称でもある。

一連の句には春らしく、下敷きに親しむ恋仲の二人の面影がある。初句に「佐保姫」が「比翼塚」に雨を降らせる。「佐保姫」は春を司る神であり。「比翼塚」は悲恋に死んだ男女を葬った塚である。二句目にはその悲恋を悼むよう

に花に涙が宿り、三句目には「接骨木（にわとこ）」という昔骨折の漢方に使った、折れたものを癒やす樹木に芽を立たせる。四句目にはそのの面影を水面に浮かべ、五句目、六句目には自身の供養を心を詠み、七句目の掲句にのは黄泉の国から届いたこの春の作者に便りとして初蝶を詠んでいる。

彼岸桜ぽつんと灯る岸辺かな　中矢えり子

「彼岸桜」の響きの中には「寒（かん）」があるのを作者は見ている。その緋色に寒に耐える姿が「彼岸」に立つのはお母様であろうか。先に逝った人が重なって見えている。「彼岸桜」に向こうの姿を重ねているとしたら、この光景は気づいてくれるかしら。

足ゆするリフトの客や鼓草　山口葉都緒

松山の城山のリフトを見上げている様子と思う。上五中七にはやわらかに「咎め」の響きが無邪気な子供を詠んでいる謂（い）いではない。しかしながら下五の季語「鼓草（つづみぐさ・つづみそう）」（蒲公英〈たんぽぽ〉のことと）には諦念がある。流れゆく時代に抗うことの無意味を悟っている姿勢がある。やわらかな春の哀しみである。

霾や母校歴史の幕閉ぢる　福島心結

廃校の現実に「霾（つちふる）〈黄砂のこと〉」を付けたのは見事な手法と思う。「霾」に全てが込められている。次句に「百余年」とあるが、その期間の連綿の青春が軽塵（けいじん）となって降り、そして消えて行く。学び舎が地域の光りであった頃。今はどうであろう。国破れても山河は在り、我々も在る。子どもらが消えるのは、国が消えゆくからであろう。

漱石がゐて虚子がゐて獺祭　源言鬼

本歌は「漱石が来て虚子が来て大三十日（おおみそか）」という子規の句。「獺祭（だっさい）」は子規居士の在りし日への思いが込められて掲句が言う「漱石」「虚子」は作者とともいにるはの句を為す輩（ともがら）であろうと。下五「獺祭隠」の字足らず。作者は参加する句座の活気にあたらずとも、そのうこを初めて訪れた友人が年歌を見て、「いるかしらこの赤く作者の胸に在りがあ日が咲き戯（そぼ）るのである。

活気の日々を受け取っている。それは前向きに生きる快活な作者の姿勢を示している。

紫竹集より（箱蔵剣）

点描となりしいばりや雪の果

檜垣　勇慈

「いばり」とは「おしっこ」である。季語は「雪の果（はて）」。春に降る降り納めの雪であるが、今月の一掲句は一連の句の初句であるが、「雪の果て」連は一般には繊細な情感の高まりがある。「名残り雪」と呼ばれるものである。

そこには「来し方（いままでの人生）」と「別れ」がある。雪に開けたいばりの穴に去って行った昔を見ている。そしてそれを見定めて日常へ返る。二句目の「リハビリ」の「姿」。三句目の「蝋燭」。四句目の「柱時計」。そこには五句目の「さ」れている、「振り返ったら見えない、過ぎ去った記憶」。「春」がある。六句目、やりきれない心は梅の香を求めて城に登る。七句目、獻欷（きょ）（すすり泣き）するような篠笛を聞き、帰れば八句目に山火事の報を聞く。九句目、林道の真ん中に人生を問い、終の宿を求め、そこに作者は身を投じ、真実を追い救世主の真摯な心は成熟した人間である。自身をつめて見つめている。自身の想像は作者の境地は詠まれている光りに感じている。

恵方巻彼方と貴方に御裾分け

高井　辰美

「恵方巻」は正式にはまだ季語とはなっていない。今の子どもたちは「豆」よりも「恵方巻」に期待している。実感としては季語とい載っている。作者も歳時記には

夢並べ残りわづかの獺祭魚

高須賀潤緒

「獺（かわうそ）」は獲（え）たものを祭る。作者は未だ獲（え）ていない〈夢〉を祭る。ここには作者は「獺」と自身の生きる姿勢を対比し、自身の生きる姿勢を対比して「残りわづか」は「夢」並べている。ここで言う「残りわづかの持ち時間をきめることを言っているのこと。そのこと作者の持ち時間のきめを言っているのこと。作者は却って初春の光りを胸に突きに冴えている。

姑の通院介助春深し

中井　康子

作者は私（箱蔵）と年齢が近い。最近ご結婚されたそれは待ちに待った春であったと想像する。しみじみとその嬉しさが伝わってくる。「姑（しゅうとめ）」に「愛する人の母」であるという思いがこもり、「私は家族である。」というびを噛み締めている一文字である。近年稀な尊喜アな心持ちであり歓喜である。季語に「春深くピュし」を持って来た意識に、心からの祝意が生じる」を感じる。意地悪な事を言う昨今の風潮に隔絶した星々の導きを素直に喜び受け取る作者に美しい時間が宿っている。

菜の花や歩む人生平凡に

得居　博秀

併せ持つ金眼銀眼や猫柳

松枝　ふみ

猫の眼は時刻を示す。忍者はつも猫を連れ

移動の瞳孔の形によっ

移り変わる日々の中で、ふと立ち止まって空を見上げる。雲の形が刻々と変化するのを、ただ黙って眺める。夕焼けが赤から紫へと移ろうとき、胸に携えていた問いが、ゆっくりと形を変えていくのを感じる。答えを急ぐのではなく、問いを抱いたまま歩き続けることの意味を、猫柳の芽吹きが静かに教えてくれる。

鹿尾菜刈る嫗の背なや朝月夜

天満　洋子

作者は「一茶の道」のある北条の地に生まれた八風土の人生を送られてきた人である。十年に垂（なんな）んとする人生を送られてきた人である。一茶の作風は、惜しみなく作物を育む地に足をつけながら、訪れる季節の揺蕩（たゆた）いをその眼は眺めつづけてきた。鎖の短い碇（いかり）を打ち付けてあるが、その碇を中心に世界はとの人生のようであるが、その碇を中心に世界はどりの風合いを巡らせてきた。一連の句には歩計が、「表札」を確かめる「つばめ」が表れ、動く「万ある人がおり、「朧月夜」さながらの「畦」もおぼつかなくなった脚にあって土を噛む人の轍（わだち）はしたたか に濃く土

生き

生きた御仁（ごじん）である。一茶の気風は当地の気候とよく馴染んだ。作者の作風は一茶のようなものを感じる。土を相手に

作者は「一茶の道」のある北条の地に生まれ

ぬ世界の存在があり、「併せ持つ」とだいこまで見ぬ世界の世界にそのまとだ見ぬ世界で生きる人の胸にそのまとだ見ぬ世界で生きる人の胸にそのまとだ見ぬ世界で生きる人の胸

死に生きる世界に軍艦も現れ、廻り来る季節を猫と鳶と語り合う。「学」に侵されないわたしたちの根っこを作者は教えてくれる。

春うらら号令を聞き猫戻る

大野つね子

戦前生まれの持つ独特な大らかさが満ちている。昭和初年の日本と令和の日本には全く別の国とる。思っていたが、民草はいつも日の当たるところに陰日向あるだろう。どんな時代にも「信頼」がある。「深い」「つながり」である。そのなかに「生まれの」が「うらら」に帰るのではないだろうか。

この「春うらら」には命同士の不動の「単なる」「つながり」を育むのが天地である。「思惑」である。「思惑」「うらら」の「同」「色無盡（しきむじん）」である。無限に色仏道で言う「如来」は「空（くう）」である。「うらら」であるという私時に「うらら」でしかも空っぽであるとい声をはどりであるそのうらら号令」と聞く耳を確かめ、目を見、毛に覆われたし作者は触れるのだ。

うてな集（箱蔵　剣）

西濵恵美子

句会では夕景ではないかと思ったが、よくよく見ると朝の景色と思った。二月尽（にがつじんは冬の終わりを伝えている。これから明日を弾く汐入川や二月尽

海と淡水の混じる「汽水域」である「汐入川」を持って来た。それは自然の技である。もちろん考えてはなくこの三つは

王国の蜂太陽の入れぼくろ

西田　上酢

彷徨常夏の島に於ける句夢幻の世界をわたしたちに於て美しくもてはやされる最も若い俳人である。南国独特の花臺に我々の美しさを教えていくれる。初句のように「春の星」「接触」とが流濃密であるもの薄い。事は外界とも暑い国での

パラオとい土地を思うとなんだかとあるオ掲句は「王国の蜂」という印象的な謂（いい。

その汀に裸足を付けるのである。

巣よのうなうだもあるろかどうなちんらミとにミなせツよバチ彼らの養蜂箱のよバチ社会なの巣築だうろいろ巣でいかだ。ないてい蜂はな黒い尻を伴っての巣に蜂のでいる。送入ったがにそ空巣がに入れてきたもかのようだ。その蜂が巣に入る。

凶暴な蜂の巣を送り込んだ。空巣に蜂がいなくなった。

以上、国作者共々の太陽のコミュニティーの臣民と感じられる。

月の朝日を喜びを持って迎えている。おだやかな風景である。作者にとって鮮明な目覚めがある。寒さと辛さが尽きる二月尽の水鳥がいるあがれを美しい影が水脈（みお）を引いている。上五の日の前の句に詠まれている。夫婦（めおと）の鴨が弾いくい五音は長い月日を土台としてA面Bの面を生にとてA面の人生のじる。終わりを告げている。なかあれば現なられるA面の

といるようだ。

寝返りや春の風鈴何処より　國米慧子

春に「風鈴」を聞くと言うことは、冬の間も家に「風鈴」があったことを思い出させる。風鈴を上げ下げ初めにした寝返りの家に「風鈴」とあったこと、そのあるたくさん記憶の存在。風鈴の音が自分の存在を示しただろう。

春の雪飲み鉄の汝と列車旅　野村董

作者は私（箱蔵）と同じ手座生まれで、射手座の射手座。射手座は冒険と遠くへ飛び知らないなる。射手座は射手座の射手座。射手座は射手座の射手座。射手座は射手座の射手座

「押入れ」から「皿」を出す、唐突な景色にあるのは「真実」である。本当に自分の身に起こったことを作者が詠んでいる証明ともなる。所謂（いわゆる）「頭で考えた」俳句を作る人はこのことがないということを示している。しばらく使うまってあったのだ。必要があってそれを引っ張ってきたことになった。ずっと寝ていた「皿」が「朝〜？」と皿が閉じられ、ちりだすと思っていたのだ。「押入れ」に寝ぼけ眼（まなこ）である。「春の夜」は「朧（おぼろ）」である。なんだか、夜であるから、話しかけてくるようでもある。ガチャガチャうるさく音を立てることも憚（はばか）られる。実景（じっけい）の中のやわらかい詩のバランスがよい。それは芯に実景実感を遠巻きの句は、轉俳句の経験が長くなると、下五は「かなり」で収めてしまう。しかし「なり」には「断言」がある。こういうところはついテクニックに走る傾向がある。経験者にはよく見て学んでもらいたいところである。

春の鳥まめについばむ野草かな　藤田　菜々

句会で戎井風蓮さんが「まめについばむ」にやられました、と仰しゃったがまさしく、「豆をつついばむ」ような鳥が地面を「まめについば」んでいる鳥と少し違ったちんを書いたがよい上でいるとうのは可笑しみがあり、光景が立ちくを読むと、地面をつついばんを思いたがよる。季語「春の鳥」からしても一読してよく浮かべたが、下五「野草かな」をよくよく作者は錦華鳥（きんかちょう）という小鳥を飼うな雰囲気もおぼえる。

大正の父の大志に落椿　辛嶋　栖守

「大正の父の大志」とはなんだろうか。当時の少年は大陸に夢を馳せたのではないかと思ったりする。その「大志」には戦争の影はあったように思う。この「落椿」に作者は何を託しているだろうか。喜びか落胆か。明治以降は首が落ちると言い、それ以前は俯（うつむ）かないとして尊んだ。それはせよこの生前にはなされかった会話と思う。父子は「それ言ったことだろう」と思ったか、「親父やっと分かったよ」と言ったか。二人の絆に椿が火が燃え移ったようである。

春泥は野積の石を囲ひけり　佐藤　南山

散歩の途上よく通るところに石材置き場があるうのはでなかろう。特別な景色を詠んだとは春の朝の日ざしがあるよう昨夜は夜通し雨が降った。に気配はないだに感じる。景色には石材置き場とい春の草も息づいている。雨が洗ったつても「野積（のづみ）」である。なら爽やかで地面は濡れ泥の堤石は何かにし掲句ては「春泥」によって春の訪れをやわらかいる。散歩の足どりも少しずつ軽くなっていくのを感じる。

掃き寄せて根元に列し落椿

野本　末枝

「椿」を句会の兼題にしてから早に過ぐ

「椿」と嬉しの多くに山茶花で日ごと咲く

「椿」がぎ目が行く後くなる椿の公園の集め

「椿」の集め暗し美るめが生もしの産目く後多よを句会の兼題にして

意がある。それは獲得したものである。獅（かわうそ）から見えているのに取れないものがあった。それは子どもの時の夢のような「金平糖」である。子どもにとって、その「缶」には夢が詰まっている。大人となって多くの物品を手に入れたけれど、子どもの頃に手にしていたものの一体感はあるだろうか。なにかよりしたもの、獺が一生懸命缶の底に手を突っ込もうとしら、獺の子を思い浮かべる。ここに、ここにとしてい触れることが出来ない。ここに見えている様子を思い浮かべる。ここに、触れることが出来ない。「雨水」の候の雪解水にしびれるような感覚がある。

せせらぎに鳥歌ひけり獺祭　今村藤生

非常に真っ直ぐな詠みで、季語の候に作者自身が感得した風景を一句にした。天地に活気が生まれ、水が跳ね鳥が歌い始めた。こうい配を古代の人は「獺」をその代表として字句に示し遺したのか、と感慨を述べている。ここには満足と安心がある。

庭木揺れ常連客の春の鳥　戎井風蓮

「常連客」の響きに華やぎがある。「鳥」には「妖精」と同じような神聖な思いを抱く人はないだろうか。神社には「鳥居」もある。作者は一種妖精を常客とする家にいる。よくよく思えば自身も、この家に住まう妖精のようなものではないだろうか。

春の鳥それはもう恋じゃないかしら　浜田幸子

タロットなどのカードでも「鳥」はメッセンジャーであるという解釈がある。そしてこれは客の顔ぶれは季節によって変化する。しかし彼らはじっくりとは顔を見せてくれない恥ずかしがり屋が多い。

人の恋に敏感である。人は自身の恋に鈍感でも他人の恋に敏感である。鳥のさえずりは縄張りの主張である。そしてそのただしその主張は「恋」と直結し遊ぶ。自身の恋に鈍感である。「恋」は「命」と「意識」が命かけているのか。現代人にのは情報が多すぎるのだろう。

二月号鑑賞（西田上酢）

嘴の口笛立つや山眠る　箱蔵　剣

眠る山に口笛を吹き続け、どれくらい経つしょうか。一羽で吹き続けた口笛の口もつくちばしになり、固く伸びています。澄み切った空気と混じり気のない口笛の高さを思います。火の鳥の猿田彦の鼻を想起しました。

ふぐ刺しは時価と書かれてお品書き　久我正明

何度も読んでいると言葉が崩れていき、おながきという言葉に不思議な情感を感じます。上品なおよげたいやきくんのような世界が浮かんできます。

落ち葉踏む音に押されて頬ゆるむ　城戸義文

落ち葉の乾いた音の中に、ふんわりとした空気と土の柔らかさを感じます。

慰霊碑の文字きはやかや日脚伸ぶ　井上まり

いつもの道のいつもの慰霊碑が今日は読めます。良い光が当たっています。ささやかな発見に心は少しだけ喜び、折り返して戻ってきた日に返す柔らかな眼差しを感じます。

寒波来る路地奥までも鎮まれり　中矢えり子

句に読まれている場所の地形が私なりに浮かびます。伸びます。奥に山が見えます。寒波が大きな家多い家々の人間のを気道が頼りなくなっ配がありまりてきます。せんびて

松山やマンション増えて年新た　山口葉都緒

飄々とした軽みを感じます。思ったことは今の所私の経験です。つもあるだ私は思っこで思うこないの遠い時に鎌倉と呼ばれこで始とはあるうえか気持は倉と思うと肯定的嬉しめはあるうもいら持ちそ鎌倉と思うえ軽いれ始とはあるうもいりそうなりまいりまるうまいりまるうまいりまるう

く覚えていそうな句なので、いつかそのようにこちらも見えた時があれば報告したいと思います。

元日や夫婦喧嘩は翌日から　中井　康子

大戦中のクリスマス休戦協定のようなものでしょうか。不気味な元日でどのような気分で過されているのかを考えるとともおかしいですね。

春来たる車椅子から杖となり　得居　博秀

怪我か病気か回復された方に春を感じられたようで見守られている、というシンプルなことを暖かい気持ちで、なんとなくなのでしょうが、文明的退化により増進する健康のようなことを少し思いました。

裸木や星に一夜を貸したるる　松枝　ふみ

日は星でも詩的な表現です。いつもは暗い空が今日は星なら満ちて、自分の影が裸木はそのまま存在感を譲りたくなるほど美しく星ていますが、や、で切れてはいますが雰囲気に一夜を貸したのは裸木だと読みました。情熱的な句です。

東の霊山白き初景色　國米　慧子

白と青の澄んだ景色に冬の空気とめでたさを感じます。シンプルな言葉のバランスが良く、引き締まった無駄のない感じがします。東の、この位置にとても良くあっていて、光をもたらしています。

朝霜の土手一斉に輝きけり　野村　菫

見たことのある景色です。昇りくる朝日に一斉に反応する土手の霜。露とは違う光の鋭さが厳しくも美しい冬の景色です。

菜箸を置く折り紙や初座敷　ミサキノバル

言葉が揃い、直線的なイメージが浮かびました。静謐で調和の取れた空間を感じます。

流木の傷の深さや去年今年　佐藤　南山

岸に流れ着いた流木を、そしてめておられます。捨てられます。切り倒されたそのようなこれ、立てた流木の傷を見つめ、流今、横たわれ壊さつ大きなさ、去年って年今年を感じます。

足向ける吊席オリオン回りけり　成本　魚乃

夜の遊園地をテーマにした連作が作られる俳句にすごく新鮮な題材がオリオンの句ワクワクしてて取り上げられます。

登山電車終着駅のおでんかな　西濵　恵美子

おでん、の座りが良く存在感があります。高尾山などのさほど高くない山の麓を思いました。終着駅という線路の終がある不思議な空間と、おでんがとてもマッチしています。

手作業の黙して進む日向ぼこ　藤田　菜々

手元に集中して長時間作業をしておられたのでしょうか。我に帰った時思わぬ進捗に嬉しくなり、同時に窓から差し込む日の中に自分もいくつかの間違いを見つけ、入念に確認しました。

三世代勢揃ひする初写真　野本　末枝

貴重な写真だと思いました。初写真の説明のようなものであれば良いとも思います。初写真とはこのようなものであれば良いとも思います。でき毎年同じように撮って並べてみたいものです。

刃の薄き母の包丁なづな打つ　青山鹿乃子

包丁の刃はこちらを向き、背中でなずなを叩きます。良く研がれ、長く大切に使われたお母様の包丁です。まな板を打つ単調な音が遠のき様々なことがうすうすと思い出されます。

露天風呂湯気に隠れし寒昴　辛嶋　栖守

あたたかさと寒さを同時に感じておられます。露天風呂に入ると大体空を見上げますが、明るい星がいくつか見えたりします。寒昴が一瞬何かの隠語のように聞こえましたが、隠れるほどの言葉がよく効いていて、平凡に見えるほどの中に馴染んでいます。

寒昴高き足場の老団地　今村　藤生

抑制の効いた言葉ですが、何か手の及ばないものをぼーっと眺めるような視線を感じます。集まって暮らす人々も、建物も老いていきます。補修を重ねながらこの先も建物は残っていくのでしょう。遠くに団地のような寒昴も輝いています。

病室の窓から見ゆる初日の出　高橋　福音

私は墓の側を散歩している時に見ました。病室でみられた初日の出は、特にそちらにいる人々に意識しました。同じ時に同じ気持ちで、同じ顔をもつ作者もあったそのように思います。

初星や間近に見ゆるオリオン座　戎井　風蓮

誰かが、生まれて初めて見た星のようなことを思い浮かべました。本当にすごく近かったのだろうと思います。慣れると遠くなっていきます。写真に撮ると遠くなっていきます。なるべく星の間近で暮らすにはいつも初めてのように星を見るにはどのような心であれば良いのでしょうか。そういうことを考えました。ありがとうございます。

第三期表紙絵俳句⑥

臺十二月号　表紙絵

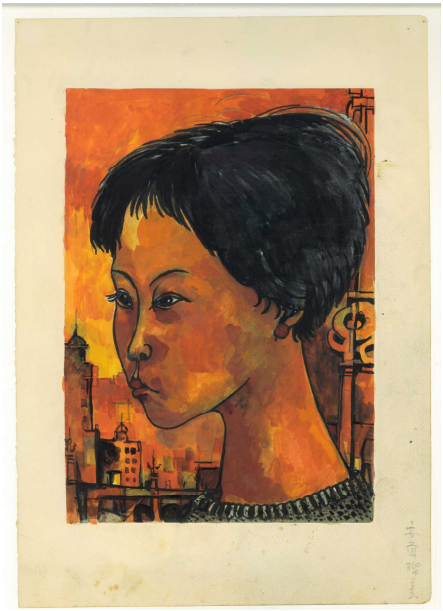
①物憂げな裸婦の指先吾亦紅　心結
②冬の蝶モデル彼女の手に取まる　末枝

③人間へ脱皮終へるや初鏡　恵美子
④乙女子の胸の蕾や寒の梅　ふみ
⑤パリのモデル肢体しなやか外は雪　義文
⑥年惜しむクレオパトラの脚線美　博秀
⑦裸木の唸りが摑む天と土　剣
⑧朱を奪ふサロメ裸体の祈りかな　南山
⑨石切の島にをみなや寒椿　栖守
⑩月と日を腕に刻み大地凍つ　上酢
⑪去年今年銃後で夫待つペネロープ　言鬼
⑫踊り子や刻む腕輪の名残空　魚乃
⑬美人画のけだるき視線春の昼　辰美
⑭右手に愛左手に富初明かり　正明
⑮裸木の清く正しくいやらしく　菜々
⑯夏の宵火焔の念ひ鎮めけり　勇慈
⑰時を待つ天釧女や年一夜　鹿乃子
⑱さらけ出す少女の想ひ冬のバラ　えり子
⑲初旅へ迎ふる裸婦のモデルかな　バル
⑳美しき娘伏し目の大寒　杜子美
㉑新玉の裸婦の見つめる爪の先　潤緒
㉒わたくしの二十の春を思ひ出づ　つね子
㉓描き上げし裸体画手酌の新酒かな　慧子
㉔冬薔薇や黙すフィメールウォーリアー　康子
㉕裸木の誰彼となくさするとこ　葉都緒
㉖八頭身雑煮の膳にどうしやう　洋子

得点	得点者	特選	入選
8	高須賀潤緒	上義バ	恵南
6	西田上酢	魚恵	え潤
5	西濵恵美子 箱蔵剣 源言鬼 檜垣勇慈 青山鹿乃子	言 え慈 ふ博 剣南 栖勇	上鹿栖 葉 勇 正 ふ
4	辛嶋栖守	鹿正	
3	藤田菜々 中矢えり子 井上杜子美 國米慈子	葉 末 洋 辰	康 博 末 ま
2	福島心結 野本末枝 松枝ふみ 城戸義文 高井辰美 山口葉都緒	潤 菜 康 ま	 洋辰 魚バ
1	佐藤南山 成本魚乃 久我正明 大野つね子 中井康子 天満洋子		義 菜 慈 剣 正 言

順位	名前	得点	順位	名前	得点
1	國米慈子	35	14	得居博秀	13
2	松枝ふみ 西濵恵美子 檜垣勇慈	29	15	高井辰美	12
5	中矢えり子 青山鹿乃子	28	16	ミサキノバル 西田上酢	11
7	高須賀潤緒	27	18	天満洋子 成本魚乃	10
8	福島心結	23	20	佐藤南山	9
9	山口葉都緒	20	21	中井康子 辛嶋栖守	8
10	井上杜子美 箱蔵剣	19	23	藤田菜々	6
12	久我正明	18	24	源言鬼	5
13	城戸義文	17	25 26	大野つね子 野本末枝	3 2

臺二月号　表紙絵



①骨咲くや春宵塗(まぶ)す頬赤し
②合格の知らせ待つ首長きかな
③アラブの春私は私で生きていく
④髪切つて大夕焼や愁顔
⑤夕映えの眼春愁深めをり
⑥紅に沁みる瞳や夏果てぬ
⑦自画像に心ひかれて卒業す
⑧啓蟄や血赤珊瑚の耳飾
⑨そぐはせる短き髪や春の服
⑩雑踏のビルの谷間や春薄暮
⑪夜が明けたら春は淋しいひとり部屋
⑫聖職をめざす眼差(まなざし)春近し
⑬晴れてなお一重瞼や冴えかえる
⑭春宵やハチ公前に俟(ま)つ女
⑮春夕焼平和を祈る少女の眼
⑯秘めし事唇を噛む黙の春
⑰横顔の美しき血潮や春夕焼
⑱春愁や少女の探る現在地
⑲誰一人私を知らぬ寒茜
⑳吉原の女となるや春の宵
㉑麗らかや天の劉生描きけり
㉒黄昏にものおもひけり巴里の春
㉓冬夕焼都会育ちの少女かな
㉔春塵へヒジャブを探す旅路かな

編集後記

☆占星術では三月三十日に海王星が百六十五年掛けての十二星座一周の旅を終え、新しくスタートラインの牡羊座０度に突入した。百六十五年前の日本は維新の胎動に揺れた時期である。今の世界と日本の激動を思えば、わたし達は似た時代を生きているようでもある。わたし達一人一人が新しい時代へ向かう志士だと思えば楽しく思える。令和の攘夷や令和の倒幕も見受けられるように思える。

☆表紙裏の言葉でもお知らせしましたが、基金を呼びかけさせて頂いております。余裕がありましたらよろしくお願いいたします。

☆並びに紙面などへの要望等ありましたらお伝え下さい。

☆表紙絵俳句の得点表が見えづらくなりましたが、パソコンのエクセルが何かの更新が必要とかどうとかで、使えなくなりスマホのアプリで作っております。しばらくはこんな風でございます。申し訳ありません。

（剣）

※うてな基金

敬称略　順不同　一口1,000円

山口葉都緒	五口
井上まり	五口
藤田　菜々	五口
くが耳鼻咽喉科（広告料・月毎）	十口

（剣）

☆有難うございました。臺発展の為に大切に使わせて頂きます。

◎毎月投句〆切り日は10日です。
「臺」誌の発行日は毎月、10日には自宅に届く事を心掛けています。
もし4～5日経っても届かない場合は、ご連絡下さい。
☆　新しい会員をご紹介下さい。
見本誌を送らせて頂きます。
☆・「臺」運営協力基金にご協力をお願い致します。

臺　令和　7年　4月号　第199

☆会費　前納のこと　→　1年間　12,700円
☆同人会費　→　1年間　20,700円
☆松山俳句協会費（700円）が含まれています。
☆会費の振り込み方法。「ゆうちょ銀行」
口座記号（番号）16120－17807831
☆編集長　・　山口葉都緒
☆発行人・発行所　〒790－0965
松山市祇園町11－10　俳句結社「臺」箱蔵　剣
☆電話・ファックス　089－932－3451

印刷所
〒790…0807
松山市平和通3の2の1
西島商店
TEL 089～924～1009